

# 幼稚園における園外保育の実施に関する研究

—10年間にわたる自然体験活動に着目して—

## Practical Study on Outside Child Care in Kindergarten : Focusing on Nature Experience Activities for 10 Years

中村 俊之

和歌山信愛幼稚園では遠足・お泊り保育・芋ほり等、年間を通して様々な園外保育の行事を行っている。各行事により対象年齢や目的があり、それに応じた内容や場所が設定されている。2004～2013年度に実施された園外保育の中で特に自然体験活動に関わる行事に着目した実践を調査し、園外保育のあり方について知見が得られた。

キーワード：園外保育、領域「環境」、領域「健康」、保育内容総論、自然体験活動

### 1 緒言

園外保育とは、施設外での保育を総称している。自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに気づくダイナミックな体験や様々な人々との関わり、生活に関係の深い情報や施設など社会生活とのかかわりの中で得られる体験などは、園内の環境だけで得ることは難しい。そこで長期の指導計画の中で園外保育を計画し、日常の園生活では味わえない多様な体験ができることが示されている（堀越 2018）。

和歌山信愛幼稚園（2020年度より和歌山信愛女子短期大学附属幼稚園から名称変更）において年間を通じて様々な園外保育が行われている。その中でも自然体験活動の視点から園外保育をとらえ、その実践を調査し今後の課題を示した。

### 2 研究の目的と方法

#### 2.1 目的

本研究は、和歌山信愛幼稚園の自然体験活動を含む園外保育の実施状況を明らかにするとともに、実施時期や参加

する対象者、行事のねらい・活動内容、さらに目的地までの徒歩移動とバス移動の設定など園外保育の効果的な実施方法の検討を目的とする。

#### 2.2 方法

2004～2013年度に和歌山信愛幼稚園で実施された自然体験活動を含む園外保育を行事ごとに実施時期・場所（目的地）・対象・ねらい・具体的な活動内容を示した。また場所（目的地）を徒歩移動とバス移動に分け、距離と実際にかかった時間に着目し分析を行う。

#### 2.3 先行研究

これまで園外保育については、宿泊保育に関する研究（山路 2006）、サマーチャレンジの活動実践を通しての園外での自然体験活動を計画する際の留意点への指摘（小林他 2016）、外遊びを園庭で行う場合と園外の公園等で行う場合の保育環境に関する研究（野中 2014）等がある。このように園外保育についてそれぞれの行事に焦点を当てた研究はあるが、本研究のような10年間という長期の期間で

幼稚園の年間行事を通して園外保育を見通した研究はない。

表1 自然体験活動が含まれる園外保育

	行 事 名	実施時期	対象
1	親睦遠足	4月下旬	全園児とその保護者
2	合宿保育	7月下旬	年長児
3	芋掘り	9月上旬	年中・年長児
4	親子ふれあいの日	6月中旬	全園児
5	秋の遠足	10月下旬	全園児
6	お別れ遠足	3月上旬	全園児

## 2.4 領域「環境」及び「健康」との関連性

本研究では2004～2013年度の実践を調査したが、2017年に告示された現行の幼稚園教育要領に示されている領域「環境」と「健康」において、園外保育の関連性が以下に示されている。

幼稚園教育要領では、領域「環境」を「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。」と設定している。さらにそのねらいとして次の3つを挙げている。

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

この中で園外保育に関連するねらいとしては(1)と(2)が該当する。実際に自然と触れ合うことが幼児の体験として大切なことであり、園外保育は有効な手段である。

また領域「健康」では、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」とあり、3つのねらいとして、

- (1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
  - (2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。
  - (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。
- とある。園外保育が生活に変化と潤いを与え幼児が主体的に楽しく活動できるのである。

## 3 園外保育の実施

### 3.1 実施内容

10年間調査した和歌山信愛幼稚園の自然体験活動が含まれる園外活動は6行事ある(表1)。この6行事ごとの実施時期・場所(目的地)・対象・ねらい・具体的な活動内容について報告する。

#### 3.1.1 親睦遠足

親睦遠足は、始園式と入園式から約2週間後をめどに開催される行事である。場所は和歌山城二の丸庭園で毎年同じ場所で行われる。時間は午前10時～午後1時30分とし、現地集合・解散としている。ねらいは、①親と子のふれあい、②新緑の自然を楽しむ、③保護者間の親睦を深めるの3つである。内容としては、全園児とその保護者が揃った時点でクラスごとに集まり全体で親子体操や親子での運動遊びを行う。その後、保護者はその場で待機し園児は各クラスごとで和歌山城周辺の散策に出かける。新入園児もいるので出発までに時間がかかったり、遠いところも行けないので年長児は年少児と手をつないでゆっくりと歩く。一方子どもが散策している間、保護者はクラスで集まり親睦を深める。和歌山信愛幼稚園は年齢別クラスではなく、1クラスに3・4・5歳児を混合して編成する縦割りのクラスであるので、新入園児の保護者は、年中・年長児の保護者との交流がここで初めて行われることとなる。園児の支援組織である母の会の総会もこの行事の約1週間後に開かれるためその準備も兼ねた保護者の親睦会となる。園児が散策から戻ると各クラスで昼食を食べる。全体が食べ終わった時点で終わりのあいさつを行い解散となる。

#### 3.1.2 合宿保育

合宿保育は、1学期の修了後、年長児を対象に1泊2日で行われる。幼稚園を宿泊拠点として海南市わんぱく公園、和歌山県立自然博物館（海南市）を活動場所とする。活動場所までの移動は貸切バスを利用した。2005年度までは和歌山市立少年自然の家（和歌山市加太、現在は和歌山市立青少年国際交流センター）でのフィールドアスレチック及び和歌山市立こども科学館（和歌山市寄合町）の施設見学としていたが、ねらいと内容との乖離が見られたため変更を行った。ねらいは、①親元から離れ宿泊を通して自信と自立を育む、②自然を体験する、③より深く子どもの様子を知り、今後の保育に活かす、の3点である。主な内容は、自然体験プログラム、施設見学、キャンプファイヤー、朝の散歩、絵画製作等である。自然体験プログラムでは、施設を歩きながら直接自然に触れ合うように工夫し、昼食後に行く自然博物館で振り返れるように連動性を持った。1クラスにつき10名前後の年長児と担任が1つの活動単位となり寝食を共に過ごすので、今まで以上に先生との信頼関係も強くなり、園児同士の仲間意識や結束力が高まる良い機会となる。この行事を節目に2学期からの運動会やクリスマス会等の取り組み方が積極的になっていく。

### 3.1.3 芋ほり

芋ほりは、2学期の始めに年中・年長児を対象の行事である。和歌山市西浜にある畑に園の通園バスを利用して行き午前中は年中児、午後は年長児に分かれて行く。ねらいは芋のでき方を知り、掘る楽しみを知る、である。畑の土を自分の手で掘り進めるのに抵抗を感じる園児もあるが、徐々に時間をかけて袋に詰めて持って帰る姿はたくましく感じられる。持ち帰った葉や蔓付きの芋を園で年少児に見せて翌年行く動機づけとしている。

### 3.1.4 親子ふれあいの日

6月の父の日の前後に園児とその保護者、特に父親とのふれあいを深めようというねらいで行われた。場所は四季の郷公園（和歌山市明王寺）、みさき公園（大阪府岬町）、和歌山信愛女子短期大学体育館の3か所を順番に開催することで年少・年中・年長児とそれぞれ違う親と子の思い出を作ることを心掛けた。公園の2か所では親子でウォーク

ラリーを、体育館では運動遊びやクラス対抗で運動会をおこなった。当初は10月に実施していた親子ふれあいの行事であったが運動会等、他の行事との都合で1学期に日程変更した。また6月の実施は雨天時の延期日や施設の調整や7月実施の夏祭りの練習日の確保等の理由で2013年以降は中止となった。

### 3.1.5 秋の遠足

秋の遠足は全園児を対象に、運動会が終わった10月中旬から下旬にかけて貸切バスを利用して実施される。当初はねらいが①しっかりと歩く、②秋の自然に触れ、親しむということで、和歌山県立紀伊風土記の丘（和歌山市岩橋）に毎年遠足に出かけていた。場所の選定に工夫がいるという教職員や保護者からの意見があり、片男波公園（和歌山市和歌浦南）、四季の郷公園の2か所を追加した。紀伊風土記の丘は山、片男波公園は海、四季の郷公園は里山と自然のロケーションを増やすことによりプログラム展開に多様性が生まれた。また園から遠方であるが2012年度から和歌山県植物公園緑化センター（岩出市）も加えた。

### 3.1.6 お別れ遠足

お別れ遠足は、年度末最後の全園児を対象とした行事である。当初この行事は年長児対象の和歌山城までの散歩の時間であったが、年長児が卒園間近の時期に同じ縦割りクラスの年中・年少児との思い出の一つとして設けられた。ねらいは①春の訪れを身体で感じる、②4月から1学年上がる意識づけである。年中児は年少児とペアを組んで手をつないで歩き、年長児はその後ろで見守りながら歩く。これは春の親睦遠足で年長児が年少児の手をつないで散策に行く予行練習も兼ねている。和歌山城内を散策し、護国神社横の広場で昼食をとる。気温が低い場合は、昼食を幼稚園のホールで食べるなど臨機応変に対応した。

## 3.2 場所（目的地）の設定

幼児にとって移動手段は身体の負担に大きな影響を与える。よって場所の選定は園外保育にとって1つの重要な要素となる。徒歩移動と車移動（貸切バスや園の送迎バス）

では体の負担は違う。以下は和歌山信愛幼稚園の園外保育で行った場所を移動手段別に示したものである。

### 3.2.1 徒歩移動

表2 園外保育の場所（徒歩移動）

	場 所	距離【km】	時間【分】
1	和歌山城 動物園	0.7	9
2	和歌山城 二の丸庭園	0.85	11
3	和歌山城 天守閣	1.0	20
4	和歌山城 砂の丸広場	1.2	15
5	和歌山城 西の丸広場	1.3	17

表2は、徒歩移動での園外保育の場所一覧である。距離は和歌山信愛幼稚園からの片道の距離を表し、時間はその間を大人が歩いた時間（分）を表している。幼児が歩くとするとその倍の時間がかかると想定できる。和歌山城天守閣までの時間が距離に対して長いのは立地が山であり坂が多いためである。よって年少児にはこの場所は不適である。この表で分かることは、幼児が片道で歩けるのは時間にして30分までで、距離にすると平坦なところで1.5kmが最長であると考えられる。また、年齢が低いとその分短い距離しか歩けないし、同じ年代でも1学期と3学期では体力が向上しているので起伏の状態も併せて徒歩移動について考慮しないとイケない。

### 3.2.2 バス移動

表3 園外保育の場所（バス移動）

	場 所	距離【km】	時間【分】
1	和歌山市立子ども科学館	1.8	7
2	和歌山県立紀伊風土記の丘	5.3	15
3	片男波公園	5.4	15
4	和歌山県立自然博物館	8.8	20
5	四季の郷公園	11.0	23
6	海南市わんぱく公園	13.0	30
7	和歌山市立少年自然の家 (現:和歌山市立青少年国際交流センター)	15.1	35
8	和歌山県植物公園緑化センター	18.6	35

表3は、バス移動での園外保育の場所一覧である。距離は和歌山信愛幼稚園からの片道の距離を表し、時間はその間を車で移動した時間（分）を表している。個人差はあるが幼児を乗せたバス移動は車酔いに注意しなければならない。長い時間乗るほど車酔いも多くなるので片道30分程度の距離が適切である。

### 3.3 ねらい・内容の設定

園外保育のねらいや内容の設定は、当初は親子ふれあいの日や秋の遠足、お別れ遠足の行事において「しっかりと歩く」ことが強調されていた。ひたすら目的地まで歩く活動のプログラム展開であった。園内で会議を重ね4年目には自然観察ビンゴや自然の中の宝物探しなど五感で直接体験できるプログラムを導入し自然に親しむような内容に変更した。

## 4 考察及び提言

### 4.1 考察

これらの実践から今後の園外保育のあり方について検討した。それぞれの行事について教育的価値を十分検討し適切なものを精選し幼児の負担にならないようにすることは大前提である。また幼稚園内で触れる自然と幼稚園外で触れる自然が連動していることが重要である。園庭の周りにある自然や絵本にある自然に園外でも気づくことができるように心がけたい。園内での体験が園外保育で深まるのである。このような身近な自然に親しむためには「どこに行くか」よりも「何をするか」が重要であると考えられる。和歌山城を年に1～2回ではなく季節ごとに訪れることにより四季を感じることができ、身近な自然の変化に気づくことができる。「何をするか」には保育者の自然に対する知識やプログラムの工夫が必要である。

幼稚園教育要領に示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「自然との関わり・生命尊重」の中に「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に

心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもち、関わるようになる。」とある。今回報告した園外保育はこれについて自然との関わりや生命尊重に深くかかわっていた。幼稚園内での生活ではどんなに行き届いた保育者の指導があっても範囲の狭いことや直接体験が少ないことなど、条件に制約されることはやむを得ないことである。それを補うために園外活動の意義が一層深められることが明らかとなった。

## 4.2 提言

以上のことから園外保育の目的地の設定として想定すると幼稚園を中心に徒歩移動では 1.5 km 以内、バス移動では片道 30 分程度の範囲が適切な場所の選定と考えられる。この基準で調査した結果、新たな候補地は表 4、5 となる。徒歩移動では車・バイク等の交通状況も目的地選定の重要な要因となるので横断歩道を渡る回数も表した。ちなみに和歌山城までは 3 回の横断歩道を渡らねばならない。横断歩道の数が多くなる程、その分保育者の危機管理に関する緊張感は高まる。表 4 の美園公園のように距離はあるが横断歩道を 1 回しか渡らないで行ける場所があれば岡公園のように和歌山城に行くよりも距離は短いが横断歩道を渡る回数が多い候補地もある。

また、距離や時間だけに着眼したのではなく、ねらいを満たす場所であり遊び場所・お弁当や休憩の場所、水の有無、トイレの設備等も加味して選定を行った。

表 4 園外保育の候補地（徒歩移動）

	場 所	距離【km】	時間【分】	横断歩道の数
1	岡東公園	0.4	5	1
2	岡公園	0.6	7	4
3	美園公園	1.1	14	1
4	和歌山信愛大学・本町公園	1.2	15	6
5	雄湊公園	1.3	17	4

表 4 は徒歩移動での園外保育の候補地である。和歌山信愛幼稚園から交通の安全性も高く 1 番近い場所は岡東公園である。また距離は 1.2 km であるが本町公園も年長児であ

れば十分候補地としてあげられる。2019 年度に開設した和歌山信愛大学も隣接しているので雨天時の避難場所等、緊急時にも柔軟に対応できる。

表 5 園外保育の候補地（バス移動）

	場 所	距離【km】	時間【分】
1	河西公園	7.7	18
2	和歌山信愛女子短期大学	8.6	20
3	さぎのせ公園(岩出市中島)	12.4	22

表 5 はバス移動での園外保育の候補地である。河西公園（和歌山市松江）は 5 つの緑地公園からなる河西緩衝緑地 1 つである。遊具施設や芝生の施設もあり夏季はプールも開設され年間を通じて利用できる。和歌山信愛女子短期大学は、体育館が利用でき、春にはたけのこ掘りの体験も可能である。さぎのせ公園は転んでもケガのしにくいウレタン遊具やローラースライダーなどの複合遊具や多目的広場もあり安全に利用できる。

## 5 今後の課題

自然体験活動が多く含まれた園外保育を 10 年間若手保育者と共に計画する中で感じたことは、保育者自身の五感を中心とした感覚的体験や自然体験をはじめとした直接体験の不足から起因する園外活動の立案の乏しが見受けられたことである。

近年、教員の資質向上の必要性が指摘されている。その一方で保育場面以外での生活体験や自然体験の機会が十分に付いているとはいえない。また実施計画を綿密に立てなければ、園内の活動に比べ危険性を伴うだけでなく当初の目的を達することが困難である。

このことから自然体験活動の知識や直接経験を備えた保育者の育成をいかに担保できるかが重要であり、そのための育成プログラムの開発が今後の研究課題となる。

謝辞

今回の研究に協力いただきました和歌山信愛幼稚園の園

長先生並びに教職員の先生方へ感謝いたします。

### 引用・参考文献

- 遠藤知里 (2016) 『『自ら学ぶ』保育者を育てる野外教育プログラムの開発』常葉大学短期大学部紀要 47 pp.61-70
- 神長美津子・堀越紀香・佐々木晃 (2018) 『乳幼児教育・保育シリーズ 保育内容 環境』好生館
- 厚生労働省 (2017) 『保育所保育指針』フレーベル館
- 小林真他 (2016) 「園外で自然体験活動を計画する際の留意点について:サマーチャレンジの活動実践を通して」富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要「教育実践研究」11 pp.123-132
- 小林操 (1957) 「園外保育 (野外保育)」幼児の教育 56 (8) pp.24-27
- 内閣府 文部科学省 厚生労働省 (2017) 『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領』フレーベル館
- 野中壽子 (2014) 「外遊びの保育環境に関する研究」名古屋市立大学大学院人間文化研究科「人間文化研究」22 pp.75-81
- 文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領』フレーベル館
- 山路純子 (2006) 「宿泊保育の取り組みから (特集 遠足・園外保育)」幼児教育 105 (9) pp.16-21